

二〇〇〇年バルトン忌 特別講演

W・K・バルトン氏と周辺の人々

石井貴志（コナン・ドイル協会会員）

1. コナン・ドイル

名探偵シャーロック・ホームズ物語の作者サー・アーサー・コナン・ドイルと、わが国上下水道近代化の父W・K・バルトン氏が、エジンバラ以来の幼馴染にして生涯の親友同士であったことは、没後百年目のバルトン忌以来、何度か報告させて頂きました。

本稿では主に、その後の探索の結果について、要約したいと思います。一度歴史に埋もれた人物が、再び世に現れるまで百年の歳月が必要なのでしょう。か、なんとも不思議なことに、一九九九年（平成十一年）八月五日のバルトン忌を境に、幼少期のコナ

ン・ドイルと、バルトン氏及びその家族に関する謎が、次々に解明されつつあります。

バルトン氏の孫に当たられる、故・鳥海たへ子さんの遺稿集は、『霧の中から』（下文化叢書）と題されています。残念なことに故人に生前お目にかかるとは出来ませんでした。が、「霧は（ほとんど）晴れました」と申し上げたいと思います。

なお、本文中、登場人物の名前が極めて類似しており、混乱される恐れがあるため、「バルトン」「バルトン」「イネス教授」「イネス叔父」「イネス・ドイル」などと、適宜使い分けを致します。また、明治時代の新聞・雑誌からの引用は、句読点を補うなど、

読み易くしてあります。

☆☆☆

コナン・ドイルは、一八五九年五月二十二日、エジンバラ市のピカルデープレイスで、薄給の地方公務員家庭の長男として生まれました。父チャールズは、有名な芸術家一家の末っ子ですが、天分に恵まれず、建築家として王立建設院の助手に雇われたものの、職を失い、次第に酒浸りになって、アルコール中毒と癲癇のため、精神病院を含む療養施設で晩年を送ることになります。

チャールズ夫妻は、十人の子供をなし、日々生活に追われますが、そうした一時期、育ち盛りの長男アーサーを引き取り、養育したのが、バルトン氏の叔母メアリー・ヒル・バートンだったと言われています。

二〇〇〇年バルトン忌の配布資料「二つの回想録」

(稲永丈夫訳)の前半は、バルトン氏の母キャサリン・バートンによる、夫ジョン・ヒル・バートン博

士に関するものですが、その中に、彼女と結婚する以前の博士一家の動静について書かれた、次の一文があります。(Dr. John Hill Burton: The

Book-Hunter: A new edition with a memoir of the Author by Katharine Burton. William Blackwood and Sons. 1882.)

一八四四年、博士はパース州フラットフィールドのラウダー中尉の娘イサベラ・ラウダーと結婚した。結婚を機に、博士はスコットランド街に引越し、同じに母と妹も、リバートン・バンクという小さな家に移り住んだ。ここで一八四八年、博士の最愛の尊敬する母親が逝去した。妹は現在もそこに住み、その親切さに引き付けられてやって来る若い親戚の子供達の面倒を見ている。(二十二頁)

この「妹」が、問題のメアリー・ヒル・バートン

です。彼女は、コナン・ドイルの妹の名付け親でもあつて、通称ロッティという女兒に Caroline Mary

Burton Doyle (1866～1941) と命名しました。

また推理作家 J・D・カーが、ドイル家の非公開資料を使って執筆した伝記『コナン・ドイル』(大久保康雄訳、ハヤカワ・ミステリ、一九九三年)にも、彼の父母が転々と引越した場所の一つとして「リバートン・バンク」が挙げられていました(同書三六頁)が、この本の初刊当時(一九四九年)には、その意味するところは、理解されていませんでしたし、ホームズやコナン・ドイルゆかりの地を紹介したガイドブックにも、「リバートン・バンク」は記載されていませんでした。

しかし、一九九九年の暮れ、英国からインターネッ ト経由で飛び込んで来た情報によって、事態は劇的に変わりました。ファーストフードの巨大企業マクドナルド社が、あるうことか、ハンバーガーショップを建設するため、リバートン・バンクの解体を、

エジンバラ市当局に申請したというのです。

そこで筆者は、現地で保護運動を進めているアレクサン・シン普森博士(元王立博物館学芸員)と連絡を取り、二〇〇〇年三月三十一日、エジンバラ市史跡委員会のケアンズ議員による調査に立会い、同議員に日本のバルトン研究者の声を伝えるとともに、一緒に内部に立ち入りを許された次第です。

この経緯に関しては、拙稿「近代上下水道の恩人 W・K・バートン余話／世界の話題となつたバートン家／名探偵ホームズ産みの親コナン・ドイルを養育したメアリー・バートンについて」(『水道公論』二〇〇〇年八月号)としてまとめてありますので、詳しくはそちらをご覧ください。

結局、市の史跡委員会が、二〇〇〇年五月リバートン・バンクを史跡として指定したことで、解体・撤去の危機は去りましたが、マクドナルド側は同年八月、建物に手をつけず、庭を潰して敷地内に店を建設する形で再申請するに至りました。今度は驚い

たことに、第三者による買収案が出たことに對抗して、反対者の先手を打ち、自発的に、ファサードにマクドナルドの「M」のロゴをつけない、建物の向きを変え、リバートン・バンクへの通路を確保する等の再修正を試みるところまで妥協して来た訳ですが、再び申請案を却下されたため、次は政治的圧力行使することを暗に臭わせています。

写真①②③で明らかのように、リバートン・バンクは老朽化が激しく、一日も早い修理が必要なのですが、手をつけることが出来ずにいます。ハムステッドの風致地区に出店した時、マクドナルドは、十年粘ったそうですから、当分の間、気が抜けない日々が続きます。

ところでバルトン研究者に、この騒動は大きな僥倖をもたらしました。と申しますのも、リバートン・バンクの所有者メアリー・ヒル・バートンが、兄ヒル・バートン博士に負けない大物知識人であったと分かったからです。

一八四八年に逝去した最愛の母イライザ・バートンは、「女の子には家事以外の知識は必要ない」とされた時代に、父親の書齋の本を盗み読むことで勉強し、結婚後は将校としてインドに赴任して、不在勝ちだった夫W・K・バートンに替わり、ルソーの『エミール』を手本に子供たちの教育に力を注ぎました。子供達の中で、彼女の強い薫陶を受けたのが、ジョンとメアリーの兄妹で、ほかの兄弟が父と同様軍人になったのに対して、この二人だけが法律家、教育家となりました。

母の死による精神的痛手から立ち直れないメアリーは、一時期スコットランドを離れて、友人とイタリアに滞在します。クリミア戦争が勃発すると、ナイチンゲールの看護奉仕活動に参加することも考えましたが、結局リバートン・バンクに戻り、親を亡くした親類の子供たち（おそらくヒル・バートン博士の三人娘も）と暮らし、現在のヘリオット・ワット大学初の女性理事をはじめ、各種の公職を兼務し

て、女子教育の確立とホームレス更正のために一生を捧げました。

面白いのは、エジンバラに到着したチャールズ・ドイルが、カトリック教会の紹介で間借りした、フオーレイ未亡人のフラットは、「スコットランド街八番地」(写真⑤)にありました。ヒル・バートン博士が、一八四四年(弘化元年)に、最初の夫人と新居を構えた「スコットランド街二十番地」、次に転居した「ロイヤルクレセント」は、角を曲がった一角で、どちらもチャールズが下宿する八番地から、目と鼻の先だったのです。これは、一九世紀当時の郵便住所録 (Post-Office Edinburgh and Leith Directory 1848-9) に記載が残っていることで確認できます。

バートン夫人は、転居から間もなく、三人の娘を残して急死しますが、ご近所のことですから、すれ違った時にお悔やみの挨拶ぐらいしているかもしれない。

☆☆☆

それから半世紀ほど経って……。

一九一〇年(明治四十三年)一月、島津久賢男爵の随員として英国滞在中の英語教師・安藤貫一は、シャーロック・ホームズ物語の作者アーサー・コナン・ドイルと、ロンドンで独占会見する幸運に恵まれました。憧れの流行作家を前にして、「あゝ此紳士こそ、多年夢寝の間にも忘れず、一度は必ずや教へを請わん、話をも交わさんと、それが作物を座右から離さざりきドイル先生よなど、飛び立つ思いは情を激せしめて、殆ど目は昏したりき」と、興奮する初対面の日本人に、コナン・ドイルが上機嫌に語り出したのは、意外にも十年以上前に東京で亡くなった、御雇い外国人バルトン氏のことでした。

『余の友人にバートンといふあり、余が竹馬の友にして小学中学大学を共に同く卒へし人、工学士となりて貴国に渡り、東京の水道工事を督して功ありきとか、君も知るらむABC Photography

を著はして世に知られたる人なり、而して常に貴国を愛し、貴国より婦人を迎へ、子供も三人設けぬ、しかるに六年以前亡き人となりしは今に於てもかへす々々惜しく思ひぬ、余は氏よりの通信にて日本といふ国の様を稍知り得たり、人情の篤くして親切なる、礼儀作法正しくして遠人を悦ばしむる、又皇室の尊嚴なる、国民の忠勇義烈なる、さては風光明媚なる、皆一として余が心を動かさざるは無かりき、一度貴国に渡り、親しく見聞せばやと思ひしこと一再にあらざりしかど、事

心と違ふ事多く、又バートン氏の通信も絶ゆるに及び、日本觀察は夢とのみなり居りしが、今日幸にも君に遭ひて貴国の事情を聞くを得るばかりか、余の素志の幾分をも達せられむとは望外の幸也』

(安藤貫一「コナン・ドイル先生を訪ふ」第一

回、『英語青年』第二十五卷・第二号、一九二一年四月十五日号)

安藤の記録には、不正確な点が散見されますが、コナン・ドイルと、本邦上下水道近代化の父バルトン氏が、幼少期以来の親友であったこと、両者が地球の裏表で文通を続け、バルトン氏が早く亡くならなければ、コナン・ドイルが旧友を訪ねて来日していたかも知れなかったことが分かります。

この事實は、知る人ぞ知る類の話で、埋もれていましたが、近年コナン・ドイルが無名時代、英国の写真専門誌 *The British Journal of Photography* (以下BJP) に寄稿した雑文類が発見され、写真研究家としても高名だったバルトン氏に、ホームズ生みの親を写真道楽に引っぱり込んだ張本人として、ドイル研究のスポットが当たるようになりました。

コナン・ドイルの写真関係のエッセイは、次の本にまとめられており、古書店などで比較的容易に入手出来ます。

Gibson, John Michael & Green, Richard

Lancelyn (Eds.): *The Unknown Conan Doyle*.

Essays on Photography. Secker & Warburg,

1982.

またバルトン氏は、大日本私立衛生会の委嘱による、明治二十年夏の北日本視察旅行について、職務上の報告と別に、プライベートな部分を「カメラを持って日本縦断」(Through Japan with a Camera)と題して同誌に連載しましたが、雑誌社が支払う原稿料を代理で受け取って、日本に送金したのが、コナン・ドイルでした。

Green, Richard Lancelyn: Conan Doyle's Pocket

Diary for 1889. ACD—The Journal of the

Arthur Conan Doyle Society, Vol. 1, No. 1

(September 1989).

この論文の著者は、コナン・ドイル関係の世界的収集家で、所蔵品の一つであるドイルの手帳に、東京のバルトン宛の送金記録(合計三八ポンド)が残っているのだそうです。

ドイルは、自分の著作物も、そのつど東京の旧友

に送っていたようです。英文学者・山県五十雄は、第一高等学校在学中、恩師のジエームス・マードックから、新進作家コナン・ドイルの名前を聞いたと回想しています。

「先生の友人で工科大学の Prof. Burton の父なる人が、医科大学を卒業して London で開業したけれど一向はやらず困っている Doyle の Patron であつて、彼が医者から作家に転進しようとしている頃書いた小説を貰い、それを Burton 教授に転送した。その小説が何であつたか私は忘れたが、Murdoch 先生は Burton 教授から借りて読まれ、その話をして、Doyle という将来のある作家が現れた、今に英国文壇の花形になるだろうと私に言われた。それは Doyle が The Sign of Four を出した一八九〇年か、或いは The White Company を出した一八九二年であつたらう。とに角私は Doyle の名を覚えていて、彼が後に

Sherlock Holmes の推理探偵物語を出すようになってから、熱心な愛読者となった。」

（山県五十雄「明治中期の英文学導入」『英語青年』一九五七年十一月号）

文豪・夏目漱石の同級生だった山県五十雄は、コナン・ドイルの小説を翻訳した。パイオニアの一人でもありました。

細かな点を言えば、ヒル・バートン博士がエジンバラで逝去したのは、一八八一年のこと。コナン・ドイルがロンドンで眼科医を開業したのは、その十年後ですから、記憶が混乱していますが、バルトン氏の父親がコナン・ドイルを援助していたと、はっきり個人的関係について説明していたことは、誠に興味深い話です。

と申しますのも、一八七〇年代末頃、コナン・ドイルが書いた短編小説「ゴアーズソープのお化け屋敷」(The Haunted Grange of Goresthorpe) が、原

稿を受け取ったエジンバラの「Blackwood's

Magazine」編集部のミスで行方不明になっていたのですが、昨年、百三十年ぶりに目の目を見て、コナン・ドイル協会から出版されたからです。

同誌はヒル・バートン博士と関係が深かった雑誌で、原稿を送るに当たり、博士から何らかのサポートがあったのではないかと推測されており、コナン・ドイル研究の上で、バートン一家との関わりを解明することが、極めて重要なテーマになって来ています。

ちなみに山県が言う「小説」が、単行本か雑誌か判然としませんが、一八九〇年（明治二十三年）には、ちょうど長編小説「ガードルストン商会」(The Firm of Girdlestone) が出版されています。この本は、一度お蔵入りした原稿を、有名になった後、改稿して出版したもので、山県の記述と符合しますし、その巻頭でコナン・ドイルは、「わが友、東京の帝国大学ウィリアム・K・バートン教授にこの本を捧ぐ」

と献辞を掲げてもいます。

もちろん、コナン・ドイルの作品中に、バルトン氏とその家族の存在が反映したのも少なくありません。特にホームズ物語の「有名な依頼人」では、名探偵が相棒のワトソンを「ヒル・バートン医師 (Hil Barton)」という架空の東洋陶磁器蒐集家に仕立てて、悪漢の家に送り込みます。ところが、悪漢の方が一枚上手で、素人芝居をあつさり見抜くや「正倉院と聖武天皇の関係を答えて見たまえ」などと、矢継ぎ早に質問を浴びせて、一夜漬けのワトソンを窮地に陥れます。

この作品は一九二五年（大正十四年）の初出ですから、コナン・ドイルが、一度も訪ねたことのない正倉院を知っていても不思議ではありませんが、少なくとも彼の旧友バルトン氏が奈良まで赴き、参観を果たしていたことは間違いありません。

●バルトン氏 当市水道布設工事を囑託せられ、

過日來滞申中なる内務省御雇工師バルトン氏は、學術研究のため其筋の許可を得、奈良県奈良正倉院の秘蔵品を拝観のため、昨朝出発同地へ赴きしが、今朝までには帰神の筈にて、引き続き神戸市の水道設計に着手する都合なりと云ふ（神戸又新日報）明治二十五年八月二日）

また「瀕死の探偵」で、ホームズは「東洋には、解明されていない病気や、不思議な病理学上の問題がたくさんあるんだよ、ワトソン」と僚友に語っています。名探偵を襲った未知の伝染病は、「スマトラの風土病」と説明されますが、実は原稿を見るとスマトラにするか、台湾にするか、コナン・ドイルが何度も迷った形跡があるそうです。この作品の背景には、バルトン氏のみならず、その弟までが、伝染病のため東洋で客死した事実があると思われる。

Doyle, Arthur Conan. The Oxford Sherlock

Holmes: His Last Bow. Oxford University Press.

1994.)

2. 弟イネス・バートンの悲劇

コナン・ドイルの弟は、コスモ・イネス教授が名付け親になって、「イネス・ドイル (1873~1919)」と名付けられました。正式には John Francis Innes

Hay Doyle と、ミドルネームが二つもある、ややこしい名前ですが、家族はイネスと呼んでいました。

他方、バルトン氏の弟も同じ名前だったので、このイネス・バートン (Cosmo Innes Burton) については、公務で東洋に出張中に亡くなったこと以外、具体的に何も分かりませんでした (B.P.: September 22, 1899)。

しかし筆者は、日中の英字新聞を調査している時、偶然に、彼が一八九〇年 (明治二十三年) 十月三十一日、上海総合病院で悪性の天然痘のため急死し、翌朝、墓地附属教会云堂で葬儀の後、埋葬されたこと、結婚したばかりの新妻が遺されたことを知りました。

そこでエジンバラに旅行した時、さらに詳しいことを調べるため、市の登記所で記録を閲覧してみたが、まず出生届によると、イネス・バートンは、一八六二年 (文久二年) 七月八日未明、クレイグハウスで生まれたとありました。届には父ヒル・バートン博士の署名がありました。

また結婚届を見ると、一八九〇年 (明治二十三年) 五月十二日、彼はレベッカ・モートンという女性とエジンバラで結婚式を挙げたことが分かりました。職業欄には、分析化学者、科学教師とあります。肩書は理学士 (B.Sc.)。この年初めて論文「各種乾燥剤について」(Desiccating Agents) を R.J.P 誌 (April 25, 1890) に発表しました。

イネス・バートン理学士は、The Chinese Polytechnic Institution (中国理工科学学校?)、中国語名不明) の科学教授として、上海へ赴任するべく、新妻を伴って英国を出発しました。The Japan Weekly Mail (以下 JWM) の船舶情報欄 (July 12, 1890)

をみると、六月二十一日、カナダ・ヴァンクーバー発の客船 Parthia 号の乗船名簿に、上海までの船客として Mr. & Mrs. Cosmo J (sic). Burton の名前があります。この船は七月七日、横浜に到着、翌日再び出港していますが、上海の新聞 North-China Herald の船舶欄には、二人の名前がありません。

JM 紙に Mr. & Mrs. Burton の上海行きの記事が現れるのは、七月二十二日出港の横浜丸 (July 26, 1890) です。おそらく新婚夫婦は、上海まで通して予約してから、電報で多忙な兄と連絡を取り、会えることを確認して、横浜で途中下船したのでしよう。夫妻の日本滞在は、一カ月余に及んだことになりま

す。兄弟は三年ぶりの再会で、建築中の浅草凌雲閣へ一緒に行ったかもしれません。

夫妻が任地に向かった横浜丸には、面白いことに、香港へ向かう H・S・パーマー一家も乗っていました。この頃、横浜水道の設計者パーマーは、まだバルトン氏と微妙な間柄になっていませんので、おそ

らく楽しい航海となったはずで

す。バルトン氏は、いつでも弟夫婦と会えると信じていたでしょうし、これが、今生の別れになるとは、思いもしなかったはずで

す。イネス・バートンは、発病からわずか二三日床に臥しただけで、あつと言う間に亡くなりますから、バルトン氏は弟の死に目に会えませんでした。

彼の死は North-China Herald の計報が、長崎の The Rising Sun & Nagasaki Express (November 12, 1890) に転載されたぐらいですから、東京の兄にすぐ伝わっていたでしょう。しかしバルトン氏は十一月十一日、浅草凌雲閣の開業式に出席して、設計について報告していますし、十二月一日には、帝大構内の外国人教師官舎(加賀屋敷九番)で日本写真会の会合を開いており、上海に出向いた形跡がありません。伝染病ということで、渡航を我慢したのかも

しれません。

一八八七年六月十八日に、コスモ・イネス叔父(前

出)が、四十五歳の若さで、ロンドンで急死して、
ますから、相次ぐ身内の不幸にバルトン氏が、相当な
ショックを受けたことは確かです (The Times : June
21, 1887)。

ところで、英字新聞の乗船客名簿をいくら調べて
も、遺された新妻レベッカ・バートンが、上海を離
れた記録もなく、その後の消息は分かりません。

バルトン氏が同年十二月、岡山市の水道敷設調査
の後、予定されていた伊万里行きを取り止めたこと
『東洋学芸雑誌』一八九一年一月二十四日号)と、
何か関係あるのかもしれませんが、推測は控えます。

3. 幻のバルトン文庫と漱石人脈

ちなみに、夏目漱石の作品や書簡・ノート類など
の関係文献から、バルトン氏の名前は出てきており
ません。

追跡妄想があったと言われる漱石の探偵嫌いは有
名で、「探偵ほど卑しい商売はない」と例の「猫」に

語らせており、前出・山県五十雄と違って、コナン・
ドイルを認めなかったと推測されていますが、実は
ナポレオン時代を舞台にした騎士物語「勇将ジェラ
ール」シリーズの方は、気に入った文章を英語でノ
ートに抜書きしています。

ジェームス・マードックは、漱石の博士号辞退問
題の時、手紙を寄越して励ました人です。バルトン
氏と同年に、アバデインで生まれたスコットラン
ド人で、東京下町の風景等を集めたバルトン氏の英
語版写真集 *Scenes from Open Air Life in Japan* に
は、マードックの解説が添えられています (出版年
不明)。また一八九二年 (明治二十五年)、マードッ
クの小説『あやめさん』(Ayame-san, A Misaki Idyll)
に、バルトン氏撮影の写真多数を挿絵として添える
協力も行っています。

また、マードックは、漂流して米国船に救われ、
英語を習得して帰国した日本人漁民ジョゼフ・ヒコ
の自叙伝 *The Narrative of a Japanese* を編纂しま

したが、東北大学図書館所蔵の同書には、バルトン氏の署名が残っていました（写真⑥⑦）。

もともとの話では、「バルトン氏の蔵書が東北大学図書館に寄贈され、戦時中に疎開していた時の梱包のまま、書庫の奥に現存している」との噂があり、日本スコットランド協会理事の稲永丈夫氏を通じて、同会の重鎮であられた東北大学名誉教授の高橋愛知先生にご尽力頂いた次第ですが、多数の関係者を右往左往させた挙句、大山鳴動鼠一匹。出て来たのは写真の本だけでした。受入スタンプにあるように、東北大学がこの本を揃いで購入したのは、大正十二年のこと。バルトン氏の署名があるのは上巻だけで、どうやら形見の品が古書店に売却され、流れ流れて現在に至っているようです。

結局幻の「バルトン文庫」は、本当に幻に終りました。本来であれば、お力添えを賜った高橋愛知先生に、直接お目にかかり、お詫びさせて頂くべきでしたが、その機会を得ないうち、先生は二〇〇一年

二月に急逝されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

さて、漱石のもう一人の恩師オーガスタス・ウッド (1835~1912) も日本写真会で活躍したアマチュア写真家で、遺言状(別掲)に証人として副署を頼むほど、バルトン氏が深く信頼した友人の一人でした。

この遺言状には、日付がありません。それどころか、文章の区切りもあいまいで、どうやらオリジナルをタイプ打ちした控えであるようです。大意は、バルトン氏が所有する動産・不動産を満津夫人に遺贈すること、相続の条件ではないが、娘の多満さんを彼女の娘として養育して欲しいとの強い希望を伴うものであるということです。

遺言状の執行人は、地震学の父ジョン・ミルン教授、わが国に船舶工学を伝えたC・D・ウエスト教授です。ウッドのほかに、もう一人の証人として名

を連ねている、W・B・メーン(1853~1923)は、電信技師にして一高の英語教師で、漱石の帝大の前任者・小泉八雲の友人でした。

遺言は一九〇一年(明治三十四年)四月十五日、英国にいたミルン氏により執行され、遺族が六百三十八ポンドを相続しました。

満津未亡人と娘・多満さんは、バルトン氏の死後も、永田町一丁目七番の屋敷(内務省官舎)で、引き続き何不自由なく暮らしていた訳ですが、この年二月の火事で、焼け出されたばかりで、JWM紙の編集人プリンクラー氏の屋敷に住まわれていた由(前出『霧の中から』)。旧友たちが、遺族の窮状を救うべく、奔走した姿が目には浮かぶようです。

4. もう一人の文豪は？

漱石周辺の人たちと、バルトン氏の関係がこれだけ明らかになってくると、漱石本人とも面識があったのではないかと思いたくなりますが、現状ではい

ま一つ判然としません。また、もう一人の文豪・森鷗外は、陸軍官僚で、ドイツ仕込みの衛生工学者でしたから、中央衛生会、大日本私立衛生会など、漱石以上に接点が多かったはずですが、こちらもバルトン氏と同じ時間に、同じ場所にいたという記録が見つかっていません。

森鷗外は、後藤新平が相馬事件に連座して逮捕された時、後任の衛生局長に擬せられたことがあります。このことは、当時の陸軍次官・児玉源太郎も請合っていたようですが、結局沙汰止みとなりました。実は失意の鷗外がこの話を打ち明けた相手こそ、反後藤衛生局長派で、ドイツ留学以来の盟友・中浜東一郎(漂民ジョン万次郎の長男)でした(『中浜東一郎日記』富山房、明治二十七年四月十三日の項)。「中浜日記」には、いわゆるお役人さんと違う、明治官僚たちの対立を恐れない硬骨感ぶりが随所に見られます。

立場こそ違うものの、同じ衛生畑にいた中浜の日

記には、不思議なことにバルトンの名前は一度も登場しません。大阪市参事会と議会在が下水道問題をめぐって紛糾した時、中浜は市議会に味方して、バルトン氏の鑑定に反する意見を述べています。『大阪朝日新聞』明治二十八年八月二十一日付

バルトン氏は、この騒動の渦中に巻きこまれた形になってしまい、皮肉好きなマスコミに悪洒落の対象にされました。別掲のニセ広告「バルトン丸」は、

「四三二（しさんじ）堂」つまり市参事会が、下水問題で夜眠れない議員諸君に飲ませるため発売したとか。『大阪毎日』明治二十八年八月十四日付

明治の日本人は、外国人や舶来商品を無闇に有り難がりましたが、日清戦争の頃から、自信をもったのか、妙に傲慢な面が出て来たように思います。

この翌年、神戸の上水道設計の打ち合わせに、アジア視察の帰途、神戸に寄った際、新聞の見出しは、あるうことか「馬頓技師」でした。『大阪朝日』明治二十九年九月二十二日及び二十五日。おそらく、元

談好きの関西人相手に抗議しても「頓馬の反対だからいいじゃないか」と混ぜ返されることでしょう。

朝日新聞などは、現代ではインテリ層の愛読紙とされていますが、この頃はどちらかと言えば軟派に属したようで、花柳界のゴシップ記事も盛んに取上げました。

当時は芸能界に当たるものがなく、芸者さんたちが今日のアイドルの役割を与えられていました。その中でも、新橋の芸妓ほん太は、トップアイドルだった訳です。バルトン氏の友人で、「写真大尽」と言われた富豪・鹿島清兵衛と彼女のロマンスは、大正末に二人が亡くなるまで、「アノ人はいま」的に身内のゴタゴタまで追跡取材されました。

森鷗外の短編『百物語』は、歌舞伎新報社主催の納涼企画に題材を求めたもの。鷗外は作中で、百物語の時、鹿島清兵衛に始めて会ったかのように書いていますが、これは文学的な大嘘です。清兵衛は、弟清三郎を館主に玄鹿館という写真館を開業し、さ

らに出版事業にも手を染めました。明治二十八年八月から『歌舞伎新報』の発行を引き継いでいます。

鷗外の弟篤次郎は、三木竹二のペンネームで活躍した劇評家でしたし、本人も演劇に造詣が深く、百物語以前に、歌舞伎新報社主催の園遊会にも参加していたことを指摘しておきます。(園遊会の景況『歌舞伎新報』明治二十八年十月三十日号)

バルトン氏の周辺には、コナン・ドイルのみならず、間接的な間柄にしても、漱石、鷗外を始めとする綺羅星のような人たちが集まっていた訳です。

JWM紙主催のプリンクリー氏は、バルトン氏の遺族の面倒を見た親しい友人でしたが、漱石はJWMに入社を断られ、面接の場で論文を破り捨てていきますし、修善寺の大患の前後、胃病のため入院した長与胃腸病院の長与称吉院長は、長与専斎の息子でした。

また日本写真会の会長は、元幕臣の榎本武揚でしたが、日本人本位の写真家団体・大日本写真品評会

の会頭になった徳川篤敬公爵(水戸侯)は、十五代将軍の徳川慶喜公の甥。最後の将軍自身も写真マニアで、朝敵の名譽を挽回した後は、華族写真会の代表を務めたほどでした。写真品評会のパトロンも鹿島清兵衛でしたから、人を介してでも、慶喜公から、写真術について、バルトン氏に質問したことがあったかもしれませぬ。

日本画のデーモン河鍋暁斎とバルトン氏は、おそらく面識があった可能性大です。暁斎のパトロンは鹿島清兵衛。プリンクリーと鹿鳴館の建築家コンドルが傾倒し、弟子になったことは有名で、ベルツ医師は暁斎の最後の脈をとった人でした。

こう考えて来ると、故・山田風太郎の明治実名小説を読んでいような錯覚に襲われます。右のような明治のスターたちとの交遊関係については、今後の研究を待たなければなりません。バルトン氏を軸に、明治という時代を切り取る「バルトン学」が確立されれば、実に面白いことになるのではないか

と、大いに期待しております。

このほかに、明治時代の新聞雑誌から得られた新事実は豊富で、バルトン氏の母や姉の消息など、報告させて頂くべき話は多々ありますが、ひとまず稿を閉じさせて頂きます。

(平成二二年八月六日)

《主な参考文献》

- Edwards, Owen Dudley. The Quest for Sherlock
Holmes: A Biographical Study of Arthur Conan
Doyle. Barns & Noble Books, 1983.
Green, Richard Lancelyn & John Michael Gibson.
A Bibliography of A. Conan Doyle. Hudson House,
2000.

新井清司「明治期における Doyle 移入史」及び拙稿
『御雇外国人バルトン』メデイアに浮かぶ肖像『優
雅に楽しむ新シャーロック・ホームズ読本』所収(フ
ットワーク出版)

* 本書は出版社の倒産により、入手困難と思われ
れます。また「誤植の殿堂」とも言える状態で、
相当読みにくい部分があることを、予めお断りし
ておきます。

武内博(編著)「増補改定普及版来日西洋人名事典」

(日外アソシエーツ)

丸山博『森鷗外と衛生学』(勁草書房)

写真説明

写真①バルトン氏の叔母メアリー・ヒル・バートン
が住んだリバートン・バンク。エジンバラ市郊外に
ある。子供時代のコナン・ドイルが一時期ここに住
んだ。市当局により史跡に指定され、取り壊しの危
機は回避されたが、マクドナルド社は敷地内への出
店をあきらめていない。写真②二〇〇〇年三月三十
一日、史跡委員会のケアンズ議員が、リバートン・

バンクの立ち入り調査を実施した。写真③カビやホコリから身を守るため、厳重な装備が必要だった。玄関近くの壁には、コナン・ドイルが住んだ時代の名残も。

写真④エジンバラ市中心部にあるコナン・ドイル生誕の地ピカルディー・プレイスには、名探偵ホームズ像が。写真⑤ニュータウン街側にあるスコットランド街。ドイル家とバルトン家の最古の接点。コナン・ドイルの父母はここで出会い、弁護士時代のヒル・バルトン博士も、この一角に新婚所帯を設けた。写真⑥⑦東北大学図書館に所蔵の『あめりか彦蔵自叙伝』。上巻にバルトン氏の署名が残っている。

遺言状説明

*バルトン氏の遺言状と執行に関する記録。一部判読困難な箇所があるため、そのまま掲載する。



写真一 1



写真一 2



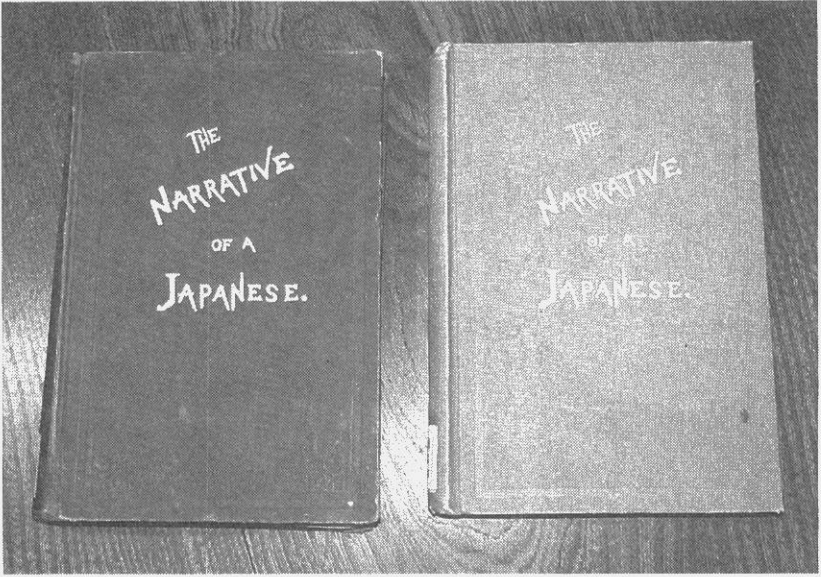
写真一 3



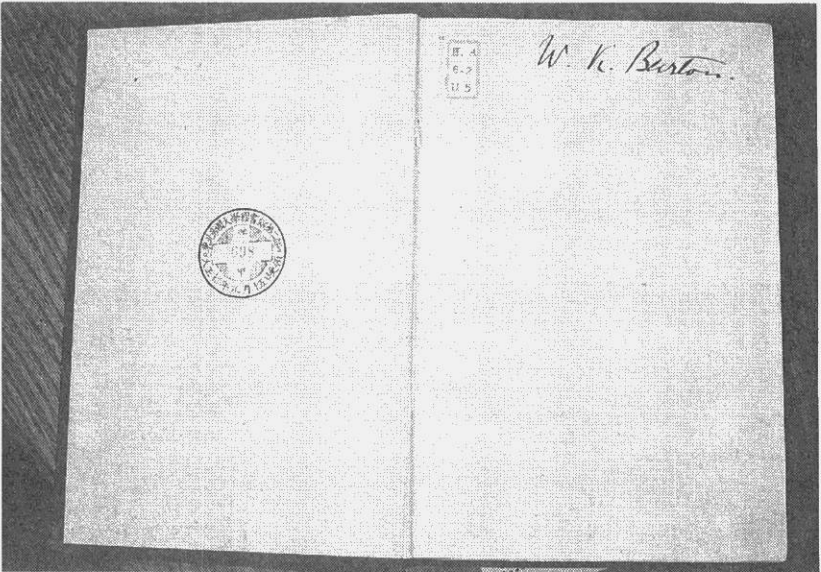
写真—4



写真—5



写真一六



写真一七

DEATH ON OR AFTER 1st JANUARY, 1898.

BE IT KNOWN that *William Dininmond Burton*
of 7 Stahome Kagata cho Kojimachi
Tokyo in Japan formerly of Edinburgh
in North Britain
died on the *5th* day of *August* 1899.
at *Tokyo aforesaid*

AND BE IT FURTHER KNOWN that at the date hereunder written
the last Will and Testament

of the said deceased was proved and registered in the Principal Probate
Registry of Her Majesty's High Court of Justice, and that administration
of all the estate which by law devolves to and vests in the personal
representative of the said deceased was granted by the aforesaid Court
to *John Milne of Shide Hill House*
Shide Newport Isle of Wight Exim
one of the executors

named in the said *will*

power reserved of making the like
grant to Charles Dickinson West the
other executor named in the said
will

Dated the *15th* day of *April* 1901.

value of Estate ... £
due of Personal Estate £

<i>638.</i>	<i>3.</i>	<i>3.</i>	<i>3.</i>
<i>4326.</i>	<i>3.</i>	<i>3.</i>	<i>3.</i>
<i>699.</i>	<i>3.</i>	<i>3.</i>	<i>3.</i>



遺言状

W E & L (112a)—24819—10000-12-69
85415—10000-11-1900

頭痛逆上下の妙薬

バルトン丸 薬 視線

此のバルトン丸といふは内務省より許可を得て調製したる新劑にて頭痛逆上下に効ある等妙あり氣ふさぎ胸痛へ眼蓋き人、耳鳴り目眩み逆上強き人いづれも視線分一帖服すれば忽ち頭痛を忘れ精神を爽かにし大小便の通じを好す市くわい至る所の藥店に賣捌居れば最寄にて御求の上御服用下されし

四三二一 堂